

# 長岡あーかいぶす 第9号

編集・発行／長岡市立中央図書館文書資料室

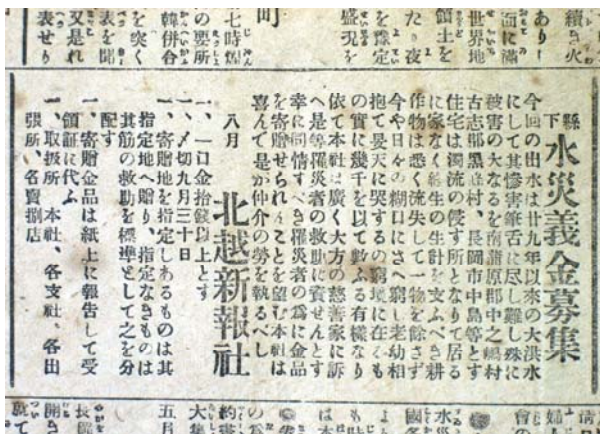
<http://www.lib.city.nagaoka.niigata.jp/monjo/index.htm>

## 文書の虫

～北越新報に見る大洪水の記録～

最新刊の長岡市史双書No.49『新潟県中越地震と史料保存(2)被災資料が地域を語る①』で紹介した刈羽郡桐沢村青柳家文書には、新聞資料が数多く含まれています。明治 40 年代から大正 5 年 (1916) ころまでの北越新報をはじめ、東京朝日新聞・東京日日新聞・国民新聞・柏崎日報などの各種新聞が、5 分冊され、紙縫り紐で綴じられています。多少の破損はありますが、保存状態はおおむね良好で、後で読み返すことを前提に、当時の持ち主である青柳三郎が、丁寧に保管していた様子がうかがえます。

すべての日付がそろっているわけではありませんが、記事をよく読むと、持ち主がどのようなことに興味を持っていたのかがわかります。県内外の災害、天皇の即位大典、北陸線と越後鉄道の全通、選挙に関する記事など、時には切り抜いたり、朱線を入れたりしながら、隅々まで熱心に読み、世間の情報をいち早く取り入れようとしていたのです。



▲北越新報社の「県下 水災義金募集」記事

(明治 43 年 8 月 23 日付「北越新報」)



▲青柳家が購読・保存した「北越新報」

なかでも目を引くのは、明治 43 年 (1910) 8 月の水害の記事です。11 日ころから降り出した雨は、県下に大きな被害をもたらしました。北越新報は 13 日から月末まで、県内各地の被害状況を克明に伝えると同時に、平瀨神社や柳原の神明宮の浸水、被害の大きかった中之島村 (中之島地域) などの被害状況写真を随時掲載しています。

テレビやインターネットがなかった当時、新聞は貴重な情報源でした。農業を営んでいた青柳家では、日々の農作業や収穫高に多大な影響を及ぼす水害について、特に関心を寄せながら、記事を読んでいたようです。

8 月 14 日付の「新報」(社説欄) では、度重なる洪水の被害を憂慮し、「大河津分水工事の成功年限短縮問題に努力すべく、政府当局も亦事の実際に看取り、誠意県民の希望に副う所あるを要す」と述べています。県民の願いがかない、大正 11 年に大河津分水は通水します。残念ながら青柳三郎は大正 5 年に亡くなったため、通水の記事を読むことはありませんでした。

青柳家文書の新聞の束からは、災害で経験したことや学んだことを、次の世代に伝えたいという気持ちを感じ取ることができます。記事を読んでいると、今からちょうど 100 年前の水害の光景が目の前に浮かんでくるようです。

(桜井奈穂子)

## 歴史公文書は語る(4)

# 新潟県産業博覧会の舞台裏

戦後間もない長岡で開催された一大イベント、新潟県産業博覧会。昭和 25 年(1950)、長岡市制施行 45 周年と戦災復興 5 周年を記念して、長岡市と新潟県が共催で、7 月 20 日から 8 月 31 日までの 43 日間、神田小学校の敷地を含む西神田町 2 丁目一帯を会場に実施されました。博覧会事務局の日誌や関係綴など、28 点の歴史公文書から、その舞台裏をのぞいてみましょう。

「新潟県産業博覧会」綴によれば、会場決定には以下のような事情がありました。「会場の位置が市内の人家の間にあった事は、博覧会場としての観覧者を主に考慮すれば適地ではなかったが市内商店街を潤ほすことが市の復興促進に寄与するものとする点より決定した」。

連日のように行われる打ち合わせや準備の過程も読み取れます。印刷会社へポスター・入場券・鳥瞰図の発注。宣伝用の歌詞・レコード・振付の準備。守衛・看視員・電話交換手の雇用。新聞社への広報の対応。開催前日の 7 月 19 日には「出品飾列の為徹夜す」とあります。

開会後の課題は暑さ対策でした。「連日の暑気に朝夕の消防ポンプによる撒水、休み場所も会期中に増設する等」の対策を講じました。そして、涼しい夜間に開放できないかという市民からの要望を受け、長岡復興祭にあたる 8 月 1 日からの夜間開場を決定します。入場者数の想定、会場警備、労働基準法の問題などから夜間開場は困難と



▲新潟県産業博覧会に関する歴史公文書

いう当初の検討結果を翻しての実施でした。「夜勤者四十七名に対し夕食を出す」から、夜間開場に対応した人びとのすがたがうかがわれます。

博覧会終了後も業務は続きます。9 月からはアルバムや会誌といった記録の作成が始まりました。博覧会で不要となった椅子や棚等の備品の払い下げを求める申請書が、市内の小中学校から届いています。戦災で学芸会用のステージ幕を失い、その都度、他校から借りていたという、小中学校の切実な状況が伝わってきます。

歴史公文書の一つ一つから浮かぶ戦災復興下の長岡。今日も市民の暮らしぶりや、職員の働くすがた、そして時代が一葉に刻まれ、綴じ込まれていきます。(小林良子)

## ●展示コーナーで所蔵資料を紹介！

互尊文庫 1 階東側入口にある展示コーナーで、所蔵資料や活動を紹介する展示を始めました。おおむね 1・2 か月ごとに展示替えを予定しています。来館の際には、ちょっと立ち止まってご覧いただければ幸いです。(小林良子)

### ☆今後の展示内容(予定)

6・7 月	互尊文庫と野本互尊翁
8 月	長岡市政 100 年のあゆみ展
9 月	古書販売目録と反町茂雄
10・11 月	中越大震災の記録と記憶

## ●「郷土史交流室」を活用してみませんか？

昨年 11 月に互尊文庫 3 階に総合学習やグループ活動の場として開室しました。所蔵資料を活用する催しや郷土史などの調査・研究活動、学校での調べ学習など(定員は 20 人)、5 月末現在で、のべ 201 人の皆さんの利用がありました。

しきりの向こうで、スタッフが歴史資料の整理作業をしていることも…。長岡の歴史に関するご相談にも、その場で応じることができます。

詳しくは、ホームページをご覧ください。直接お問い合わせください。利用料はかかりません。ご利用をお待ちしています。(田中祐子)



# 小川 當知

文政4(1821)ー？

米百俵の故事で知られる国漢学校。しかし、その建物を描いた絵は、旧長岡藩士・小川當知（とうち）が著した『懐旧雑誌』でしか見ることはできません。

小川當知（善右衛門）は、元和4年(1618)の牧野氏の長岡入部に従った三河以来の家臣という由緒を持つ藩士の家に生まれました。江戸藩邸勤務や曾根代官職など、能吏として活躍する一方、絵と文の才を持ち合わせ、『懐旧歳記』と『懐旧雑誌』を著しました。

明治9年、最初に著した『懐旧歳記』は城下の年中行事の記録です。上・下巻と拾遺に掲載された約80枚の挿絵に、「幸の神」や「ひな祭り」、蔵王権現の祭礼などが掲載されています。

姉妹編の『懐旧雑誌』は、「参州牛久保之壁書」などを収録した資料集としての性格を持つもので、明治12年(1879)に著されました。序文に「古本、反故の中より拾ひ集て、長岡古事に関係せる、種々の書類を取纏て」完成したと述べており、『懐旧歳記』の好評を受け、意欲的な調査・研究を経て本書が成ったことがわかります。

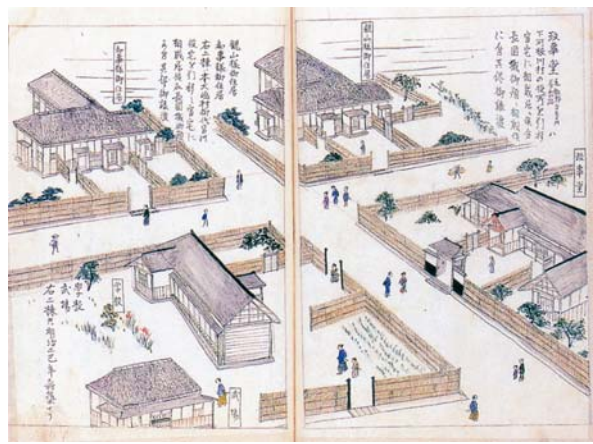
歴史資料に基づいた記述とともに、當知が見聞したエピソードが記されているのも両書の特徴です。例えば、『懐旧雑誌』には「富永村江焼石飛び来る事」と題された現在の燕市に落下した米納津隕石に関する逸話があります。天保8年(1837)6月27日に落下した隕石を、藩の奉行・今泉岡右衛門が長岡城下へ取り寄せ、絵師の辰巳教祇に描かせて江戸藩邸へ送ったというのです。ただし、當知は隕石を火山から噴出した「焼石」（浅間山の噴火石に似ていると記しています）と思い込んでいたようです。



## ●開催中の行事～詳しくは文書資料室へどうぞ！



▲長岡市史双書を読む会での資料展示（5月21日）



▲国漢学校を描いた絵図（小川當知『懐旧雑誌』下）

記録に熱心な當知でしたが、戊辰戦争については、詳細な「北越戦争之概略」を『懐旧雑誌』に載せているものの、自らの戦績を全く語っていません。當知は、慶応3年(1863)9月に新潟の料亭・鳥清で開かれた北越11藩と会津・桑名藩などとの連合会議に長岡藩の代表者として出席しました。後の奥羽越列藩同盟につながる重要な会議への出席でしたが、これ以外、戊辰戦争における當知の動向を示す記録は確認できません。「長岡にて方向を誤り候発端なり」（「北越戦争之概略」と開戦を評した批判の眼差しが、記録の途絶えを招いているのかもしれませんが。「今見れば やけ野の原の 桑畠 これぞ昔の 玉たれのあと」と、朝寝坊長起の雅号で狂歌を詠んだ當知の目に、焼け跡の城下はどのように映ったのでしょうか。

明治29年6月、75歳で描いた城下絵図を最後に當知の足跡は再び途絶えます。長岡城の面影を現代に伝えた小川當知の人物像は、まだまだ謎に包まれています。（田中洋史）

### 【参考文献】

- ・長岡市史双書No.35『長岡懐旧雑誌』（平成8年）
- ・長岡市史双書No.44『長岡城之面影』（平成17年）

## ☆古文書解読講座「古文書に見る長岡のすがた」

長岡郷土史研究会と共催で実施。入門コースと一般コースに分かれ、80人の参加者で、5月12日に開講。全10回開催します。

## ☆『郷土長岡を創った人びと』を読む会

まちづくりに貢献した人物を紹介した『郷土長岡を創った人びと』がテキスト。知られざる先人たちの足跡にきっと出会えるはずです。6月22日から全5回開催します。（石井順子）

① 長安下城年集

② 長安下城年集

安禅寺文書「御用記條簡」  
(宝徳2年～安永元年)より  
今回は少し長めの言葉です。  
共通する2文字の漢字をヒント  
に考えてみてください！

古文書クイズ 九  
「ちよっと一息」

古文書の読みと住所・氏名・電話番号を、葉書・FAX・メールで文書資料室へお送り下さい。平成22年9月1日必着です。全問正解者の中から抽選で5名の方に粗品を差し上げます。

【前回の答え】①高畑村 ②成沢村 ③呉服町

### 《新たに公開した所蔵資料一覧》

※寄贈・寄託・購入順。保管場所の都合で当日閲覧できない資料もあります。

- ・和宮関係資料（近世、2点、購入）
- ・塚田正之助収集資料（近代・現代、120点、鉄工業関係資料等、塚田攻氏寄贈）
- ・中川甚平旧蔵資料（近代、2点、大野屋旅館宿泊客の色紙、中川百合氏寄贈）
- ・三島郡雲出村井上家資料（近代・現代、53点、久保田哲夫氏寄贈）
- ・乙吉公民館文書（近世～現代、1,932点、被災資料、乙吉町内会寄託）
- ・五十嵐茂撮影写真資料（現代、6点、昭和36年水害写真等、五十嵐茂氏寄贈）
- ・三島郡浦村西脇家文書（近世～現代、942点、被災資料、西脇博一氏寄贈）
- ・古志郡富曾亀村亀貝西山家文書（近世・近代、230点、被災資料、西山作衛氏寄贈）

### ●史料保存こぼればなし(2)

#### 救援物資に貼り付けられたラベル



文書資料室では、中越大震災の際に全国の皆様から届いた救援物資のラベルを災害アーカイブス資料として保存しています。ラベルは、送り主の住所で都道府県別に分類。地名が判読できないものは郵便番号・電話番号を手がかりに、インターネット検索等も駆使して調べました。

今回の作業で最も苦労したのは、残っている糊の影響でラベルが切れないように、慎重に剥がさなければならなかったことです。約1万点にのぼるラベルをどのようなかたちで活用していくのかは、今後の課題ですが、災害記録の一つとして後世に伝えていければと考えています。(渡邊勝明)

《編集後記》▽4月の人事異動で、金垣孝二室長が地域振興戦略部へ異動、稲垣美知子嘱託員と野村和正嘱託員が退職。石井順子室長、渡邊勝明臨時職員がスタッフに加わりました。▽年1冊の長岡市史双書の編集を終えると新しい年度が始まります。川口地域も加わった新長岡市の歴史資料の保存と活用に、各地域のこれまでの郷土史研究をふまえながら取り組んでいくことが課題です。(田中洋史)▽一見難しくとらえにくいような歴史公文書。しかし、読んでみると、時代がありありと伝わり、心がふるえ、可能性の大きさにふれた想いになりました。(小林良子)

平成22年6月15日発行

編集・発行：長岡市立中央図書館文書資料室

スタッフ：石井順子、田中洋史、小林良子、桜井奈穂子  
田中祐子、渡邊勝明

〒940-0065 新潟県長岡市坂之上町3-1-20

(長岡市立互尊文庫2階)

TEL0258-36-7832、Fax0258-37-3754

E-mail: monjo@nct9.ne.jp